

J-SAILING

JAPAN SAILING FEDERATION



NO.98

www.jsaf.or.jp



おいしさが織りなす
プレミアムなハーモニー。



おいしさ自由形
プレミアムクラッカー



ヤマザキナビスコ

JSAFからのメッセージ

今年を振り返り

本年4月1日に公益財団法人日本セーリング連盟となりました。

6月16日定時評議員会を開催して役員の選任と決算報告が承認され、新たな体制が確立されました。3年に及ぶ移行申請プロジェクトの努力が実を結んだ結果です。

また世界に羽ばたくユース世代を育成するため2年余り熱心な議論が行われ、次世代ユース制式艇種として420級とレーザー級を選定し、高体連や都道府県連と協調しながら普及発展を目指しています。420艇購入のための寄附を集め、JSAFが新古艇を購入し、半額で希望する県連に納入しています。また、高体連や国体委員会とともに2015年インターハイ及び和歌山国体からの導入に向けて取り組んでいます。

ロンドンオリンピックでメダルを目指して戦いましたがかなわず、残念な結果となりました。本号に掲載されている総括も踏まえ、新委員長のもと今後の選手強化に向けて取り組んでいきます。2016リオデジャネイロオリンピックでのカイトボードの話もありましたが、11月開催のISAF年次総会では日本からの働きかけもあり、従来のウインドサーフィンRS-X級が採用されることになりました。2020オリンピックの開催地は、来年9月のIOC総会で決定されますが、東京開催に向けオリンピック招致委員会も活動に取り組んでいます。

今春、スポーツ振興センターのマネジメント助成金及びJOCコーチへの補助金に関する寄附金が不適切であったとの裁定を受け、該当する金額を返還することにいたしました。また、再発防止と改善の対応を策定いたしました。

昨年の東日本大震災では、全国各地の団体及びセーラーから多くの支援が寄せられました。今夏、宮古商業の高校生6名を米国に派遣し、サンフランシスコのヨットクラブと交流しました。

また、今年は大学ヨット部の卒業生が就職試験に合格し、来年度より和歌山・京都・愛媛・茨城の公立高校に就職する予定です。我々もこのような活動を支援していきたいと考えています。

メンバーのみならず皆様におかれましては、どうぞよい年をお迎えください。来年が素晴らしい年でありますように。

JSAFのメンバーになれば

- ・メンバーズカードが発行され、公式競技参加の資格が与えられます。
- ・会費の一部が傷害保険の保険料に充当され、セーリングの事故による死亡、後遺障害に適用されます。
- ・JSAFの会報誌「J-SAILING」が送付されます。(高校・ジュニアを除く)
- ・各種講習会などに参加でき、資格を取得する際の条件に適用されます。
- ・「J-SAILING」をはじめ、所属する加盟団体からもセーリングに関する各種行事やレース日程などの情報が提供されます。

加入、更新手続きの詳細は各加盟団体にお問い合わせください。

<http://www.jsaf.or.jp/dantai/>



470級でトップ3を走る日経大3艇

第77回全日本学生ヨット選手権

同志社大

総合優勝!!

470級優勝は

日経大

11月1〜4日、滋賀県大津市柳が崎ヨットハーバーで「第77回全日本学生ヨット選手権」が開催された。第1回大会が開催されたのは昭和8年（1933年）のこと。全日本インカレとして親しまれている歴史ある大会に、全国水域予選を勝ち抜いた470級24校72艇、スナイプ級24校72艇が出場。大学ヨットの頂点を目指して4日間の熱戦が繰り広げられた。

レポートと写真／平井淳一

波乱の琵琶湖

琵琶湖は吹かない。その前評判を覆す強風で大会は幕を開けた。

日本海から太平洋へ抜ける前線の影響を受け、第2レースが始まる頃には10メートル以上の南西風が選手を襲った。

この状況を踏まえ、レース委員会はスナイプ級第2レースをキャンセル。470級のレースは進行していたが、トップ艇が最終マークをまわるところでノーレースとなり、全艇ハーバーバックに。いくつかのボートはデイスラスト、リーグ・セール破損などの大きなトラブルを抱えることになった。

水深の浅い琵琶湖で沈めると、マストが底部に刺さり、抜けなくなってしまう。沈艇がそのまま動けなくなり、レスキューボートに救助される場面も見られた。大会運営によれば、マスト破損は15本、艀装品の交換は40件あったとのことだ。

大会2日目以降は、いかにも琵琶湖らしい気まぐれな風に悩まされた。山間から吹き降ろすブローは海面の有利、不利を明確に分けることになり、時にはまっ



スナイプ級で優勝し、総合優勝を飾った同志社大 (リコール番号 34)



470級での強さが目立った日経大チームの面々



8年ぶりの総合優勝を果たした同志社大チームのメンバーたち

たく風がなくなることも。
 第6レースの470級では、出場72艇中52艇がフィニッシュできず、スナイプ級は49艇がDNFとなった。さらに第9レースの470級ではフィニッシュできなかったのが72艇中7艇のみ。65艇がフィニッシュできないという信じられない状況となった。

これを「琵琶湖の風だから」で片づけてしまえば乱暴すぎる。大会初日の荒天救助、出場艇の9割強のDNFが出るようなヨットレースが選手権にふさわしいと言えるかどうか。日本一を決める選手権である。選手には最高の舞台で戦ってほしいし、その舞台をつくり上げる運営組織も最大限の力を注ぐべきだろう。大学ヨットが抱える問題のひとつとして考えていきたい。

圧倒的な日経大の470級

いくつかの波乱はあったものの、やはり上位に名を連ねるのは強豪校である。これまで琵琶湖大会では、地の利を生かした地元大学が活躍してきた歴史がある。

総合優勝が設けられた昭和52年(1977年)以降、琵琶湖で行われた全日本インカレでは立命館大、同志社大、京都産業大といった地元勢が総合優勝を遂げ、他水域校の総合優勝記録はない。琵琶湖以外の大学には鬼門の水域であり、今回も地元勢の活躍が期待された。

レースが始まると470級は、日本経済大が驚異的なスコアで他校を圧倒した。大学ヨットのなかでは新参ともいえる日経大は、これまで9回の出場で6回のクラス優勝を遂げている。しかし、スナイプ級が活動していないため総合優勝に絡むことはない。他校は、確実に上位に入る日経大を避け、主力選手をスナイプ級にコンバートする戦略をとることもあるようだ。



第77回全日本学生ヨット選手権

そのため、470級は日経大の強さがさらに際立つことになっている。第2、3レースでは、日経大3艇が1、2、3フィニッシュを決めるなど大学生のレベルを超えるレースで、最終日には予備選手が登場するほどの余裕を見た。

「2連敗を止められたのがうれしい。レースが始まるまでは、どんなレースになるのか、どんな風が吹くのか心配だったが、初日の強風を走ってチーム全員がふつきた。今回は、だれかが失敗しても、だれかがカバーしてくれているという安心感があった。それが自分たちの強さだと思っています」(外蘭潤平主将)

クラス優勝を果たした日経大は、2年ぶり7回目の優勝。鬼門といわれた琵琶湖大会を圧倒的な力でねじふせた。

同志社大、総合優勝

一方、スナイプ級は琵琶湖を拠点とする同志社大が6年ぶりにクラス優勝。さらに、2004年蒲郡大会以来8年ぶりとなる総合優勝を獲得した。帰着後のハーバーでは、選手や応援に掛けた卒業生が一緒に念願の総合優勝に大歓喜した。

「今年のスローガンは王座奪還。大会前から優勝候補と言われ、さらに地元開催。OBからも期待され、インカレ2カ月前ぐらいから、眠れなくなるほどのプレッシャーを感じていました。でも、チーム全員で楽しいレースができたと思う。4年生はこれで部活動を引退しますが、ほかの大学の選手たちも社会人になってもセーリングを続けてほしい。インカレで戦った選手たちと別の舞台でまた戦いたい」(西村秀樹主将)

終わってみれば、前評判どおり、日本経済大、同志社大の実力が他校を圧倒した第77回全日本学生ヨット選手権。来年の全日本インカレは兵庫県西宮で開催される。



インカレ総合優勝の記

海では気づかないことが習得できた

レポート／蔵道 孝文（同志社大学体育会ヨット部監督）

自主性を重んじた日々のトレーニング

私が監督に就任し、今回が6度目のインカレです。就任前年の小戸インカレでは470級で予選落ちしたものの、スナイブ級優勝という成績でした。

その後、部員が減少し、それに伴い成績も下降の一途を辿りました。そこで行った対策は部員の確保です。

セレクションに頼らず、一般学生を部内で育て上げることに重点を置きました。今回のインカレでレースに出場したメンバーが、入部以来、強化してきたメンバーです。

もちろんこのメンバーを勧誘し、教育してきた卒業生の功績は大きいです。本インカレにおいて、最も多く乗員交代を行っているのは470級で日本経済大学、ついで我々でした。スナイブ級では我々が最も多く乗員交代を行っているものと思われます。選手層の厚さゆえの結果だと思っています。

部員が少ないときは、万が一、レースメンバーが一人出場できない状態になると戦力が極端に低下してしまいます。そのような状態では部内で競争の原理が働きません。ゆとり教育世代の部員には、強制的に競争の原理を働かせねばなりません。

経験者、未経験者を問わず、努力し、成果を上げた者をレースに出場させる。また、他水域のレースにも積極的に出場することにより、情報の収集能力を高め、レース経験を多く積むよう心がけました。レースに出場した部員はそこで得た情報と反省を部内にフィードバックし、部員全員で共有し、対策を立て、日頃のトレーニングで克服するよう努めました。

さらに、部員自らで考え、計画を立て、行動することを重視しました。コーチに最初から頼るのではなく、コーチも頭から指導すること

はせず、必要に応じ修正、指導を行うことを心がけ、自主性を重んじました。やらされるのではなく自らが取り組むという心構えが前面に現れ、部員の表情にも活気がみなぎってきました。

「セーフティーでよいスタート」を心がける

そして迎えた今年のインカレ。琵琶湖での開催ということで安定した風でレースができなのでは、という他大学の不安と同様、我々にとっても優勝への最大の敵は琵琶湖と自分自身でした。

地元が有利であることは百も承知ですが、よく知るが故、琵琶湖の怖さも熟知しています。そこで考えたことは、先行逃げ切りの重要性を強く認識することです。練習においてもその日の最初のレースで如何によいスタートを切るかを心がけました。よいスタートといってもセーフティーでなければなりません。「セーフティーでよいスタート」と口で言うのは簡単ですが、高い技術と精神面のコントロールが必要です。

今回、第1レースがよい形で入れたのも、日頃のトレーニングの成果です。他の競技と違い、何レース行えるかわからないヨットレース。とくに琵琶湖では、追う立場の選手が精神的に負担を強いられます。そこで優位に立てたことは、今回の総合優勝をつかむ上で大きな要因だったといえます。

海に比べ風には恵まれないものの、その環境を受け入れ、逆にそれを生かしたトレーニングを行うことで、海では気づかないことが習得できたと確信します。

成績が低迷していた同志社ヨット部ですが、今回優勝できたのは部員、コーチ、OB会の底力の結集です。そして、学生ヨットに携わる多く関係者の方々に感謝し、インカレが学生にとって価値ある戦いの場でありつづけることを祈っています。